

Uターンしてゲストハウス

農泊を推進する全国組織である「未来ある村 日本農泊連合」が3月17日に発足するなど、農泊への関心が高まっている。インバウンド（外国人の訪日旅行）の増加等も背景にして、「農山漁村において日本ならではの伝統的な生活体験と農村地域の人々との交流を楽しみ、農家民宿、古民家を活用した宿泊施設など、多様な宿泊手段により旅行者にその土地の魅力を味わってもらう」ことをねらいとする。

ゲストハウスきーず

純農村地帯ではなく町屋も入り混じった愛知県西尾市の吉良町の話だ。いわゆる農泊とはイメージは異なるが、故郷の吉良町に戻って「きーずハウス」をはじめた友人の元新聞記者、永井孝介さんが、今年2月に宿泊施設「ゲストハウスきーず」をオープンした。

「きーずハウス」は、ご両親が亡くなって残された家を改築して

1年半ほど前にスタートさせたもので、地域のコミュニティセンター的な機能も兼ねたカフェと習塾や歴史を知る会等さまざまな集まりを開くとともに、食事やお茶、アルコール類も提供する。こ

ある。ここで出される食材は基本的に地元産で、しかも逸品ばかり。食材の質の良さを実感させる。また地元では「赤馬の名君」として慕われる吉良上野介義央（よしひさ）公の菩提寺である華蔵寺をはじめ古刹が多く、尾崎士郎記念館

時流を読む

Uターンして ゲストハウス

農的デザイン研究所代表 蔦谷 栄一

の「きーずハウス」での経験を踏まえてゲストハウスを開始した。

地元と趣味へのこだわり

ここで「きーずハウス」の特徴を紹介しておきたい。第一が地元の食や歴史等文化へのこだわりで

もあるが、これらに詳しいことは勿論だが、案内等可能なしつかりとした人的な連携を持つ。

第二が永井さんの趣味が存分に生かされていることである。永井さんはピアノの演奏が趣味で、退職金を注ぎ込んで購入したドイツ

のザウターのグランドピアノが置かれている。このピアノを中心に、音楽好きが集まって、即席コンサートもしばしば開かれる。

第三が何よりも人の出入りが多いということである。朝からちよつと寄つてみたという人が頻繁に顔を出す。そうした中にはスタッフ的に何かと手伝ってくれる人も少なくない。

楽しんでこそ人を呼ぶ

こうした地域でのコミュニティ基盤を積み上げながら、次のステージとしてのゲストハウスをスタートさせたもので、永井さんの取組みは農泊に取り組もうとする人たちに貴重な示唆とノウハウを提供しているように思う。

ところで政府は農泊を農家の所得増大にも結び付けて位置付けているが、経営的に楽なものではない。むしろ人との出会いや交流を楽しみ、地域の良さを発信していくことが人を呼び、それがまたやりがい、生き甲斐にもつながってくるということではないか。